

端山貢明

地域づくりは まずインターネットから

情報フォーラムの考え方

——いまインターネットで地域の活性化を図ろうとする動きが盛んですね。ここ山形でも、インターネットは地域おこしの一環として位置づけられているんですか。

地域おこしと言うと、すぐお金儲けに結びつけがちですが、お金儲けは結果としていつてくるもので、まず文化として、地域の人たちが自分たちにとって大事なものの、誇れるものは何かを見つめることが大事です。それをどうしても世界の人たちに渡したいと思ったときに、はじめて世界に公開する効果が生まれるもので、ネットワークの技術を導入すればなんとかなると考えるのは違うと思いますね。

誇りを持つて他の人に知らせる価値のあるものは、どこの地域にも必ずあります。よくみんなが陥る間違いは、地方の時代だから何か情報発信をしなくてはいいけない、では何を発信したらいいでしょう、という発想です。そして、問題をうろうろと探し回る。これは逆なんですね。少し問題意識を持てば、すべての人の中に問題発見が当然あります。そこから地域の問題、地域が誇れるものが当然見えてくるでしょう。問題発見とは問題を探し回って見つけるのではなく、問題の構造を発見することなんです。

どうしても発信しなければならぬ内容がはち切れるばかりになったら、そこで、はじめてインターネットを活用すればいい。

——今回見せていただいた「ネットフォーラム」がめざすところも、そのような考えるネットワーカーを育てることですか。

そうですね。これまでの大学の生産力とは、学生の教育とか研究といった狭い範囲のものでしたが、現代の求めるものは、大学の生産力が地域と結びついて、地域の生産力の中核として力を発揮する、そういうものだと思います。そのためには、大学と地域がお互いにそれぞれの一部であるようなライブな関係でなくてはならない。この、市民も学生も自由に参加できる「ネットフォーラム」というプログラムは、まずそのための基礎づくりの1つと言ってもいいでしょう。

ここでは、小学生から高齢の社会人までという層の深い年齢分布の人たちが、私たちが寺子屋方式と呼んでいるシステムの中で、情報化を自ら体現し実行しています。私が密かに計画している将来の全世代大学（乳児から高齢者までが知を軸にさまざまな形で出会う



知縁社会の試行を始めたものです。

ここでインターネットのホームページのつくり方などの技術も具体的に身につけますが、それはプログラム全体の中ではほんの一部を占めているだけで、大事なものは活動意識の高い市民や学生を核にして、地域にネットそのものをつくっていくことなんです。もちろんインターネットは最終ゴールではありませんね。常に新しい社会的要請に応え続けるネットシステムをつくり育てなければならぬ。その意味でネットワーカーと言うより、ネットコンポーザーですね。

フォーラムという言葉にはいろいろな意味がありますが、もとはローマ時代の公会の広場のことで、そこでは、すべての人がいろいろな問題に触れて、さまざまな意見を交換し互いに評価する。インターネットもそのような場でなくてはいいけないと思います、ここでそれ

（はやまこうめい）氏
一九三二年東京生まれ。東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。パリコンセルヴァトワールに学ぶ。オリヴィエ・メシアンに師事。作曲活動の傍ら、コミューン・メシアン・メディア、芸術表現メディアとしてのコンピュターに着目。コンピュター・アート・センター、ソニアル・ダイナミックス研究所を設立し、コンピュターと人間および社会、教育との関係を追究。具体的な研究開発にも取り組む。現在、東北芸術工科大学教授・同総合研究センター・センター長。著書に「今日と明日の間の科学技術」「イメージ・シンセティクス」などがある。

を実現するための小さな核づくりをしたいと思つて、このプログラムを「ネットフォーラム」と名付けたわけです。

実はこの情報フォーラムの考えは、一九七四年に私たちが通産省の委託を受けてコンピュターを機軸としたネット「インフォーラム（INFORUM: Information ʌ Forum を合成）」の研究をしたときの構想に発しています。これからの社会は、人々が個々の主体性と権利において自由に意思決定行動選択ができるようなシステムが社会メディアとして不可欠であり、それを支援するものとしてコンピュターと通信の機能が有効であると考えたのです。しかし、当時はまだコンピュターを社会メディアとして捉える発想が一般的ではなくて、日本ではなかなか人々の理解が進むに至りませんでした。

——いま世の中は、何だかよくわからないけどインターネットという感じですが、端山先生がコンピュター通信に関心を持たれたのは早かったんですね。

個人的にコンピュターに関心を持ったのは五〇年代の終わりごろです。UNIVAC Iが一九五一年にリリースされてからコンピュターがコンピュターらしくなった。そして、その社会的な実効性が見えてくるようになったのが、そのころです。

一九六四年にIBM 360がTSSを社

会に提供し、アクセス側の主体性に対応するメディアの特性が人々の前に明確になり、そして六〇年代の終わりにはコンピューター通信が社会化されるようになりました。いまお話しした通産省の委託研究では、私たちはサーバーをネット上において自宅からでもアクセス側の主体性によりネットを活用することのできる、世界につながったシステムを提言したのですが、当時認識できた流れの中では当然の方向性と考えていました。同時期にアメリカではインターネットの原形が始まっていたから、概念としては同じいいところを行っていたのじゃないかと思えます。

WHOMを考えよう

——あのころは、私たちにとってコンピューターは、まだ高性能計算機という感じでしたからね。

ネットについて、そのころ私はこんな言い方をしていました。「これは人間の脳を裏返しにして、地球全体を包むものだ。それは人類の第二の脳新皮質だ」と。それは、脳のさまざまな機能一つ一つに対応した写像空間がつくられて、それが地球全体を覆うというイメージですね。そして重要なことは、ネットワークはすべての部分が固定的に常に稼働していなければならないのではなく、必要に応じて必要な部分が必要な状態で作動すればいい。つまり求められるのは非決定的恒常性です。必要に応じて必要な要素同士が必要な構造を持つ、非決定的な柔軟な方法がこれからは重要になるだろうと。

このようなシステムの理想は、孫悟空の「きんと雲」が示す技術的要件です。その最たるものが、必要な条件があるときそれに対応し

て現れ作動し、その条件がなくなると消えてなくなってしまうというあのスーパースピードです。そして、他の能力もすごく高い。どこそこへ行けと言ったと、時速十萬八千里で一瞬にして行ってしまう。「きんと雲」は音声認識、言語解析の能力や、オートナビゲーター機能も持っており、しかも天候に左右されず、ゼロ速度から一気にスピードアップしても孫悟空がよろめいてひっくり返ったりせず、着地もスムーズな高度な制御機能付き。保管場所もない。まさに理想のトランスポートーション機能を持ったものです。このような理想的なメディアの要件を当時から追求し、いま最も進んだ形で体現し始めているのが、IT（情報技術体系）の分野でしょう。

こんなことをそのころ息を荒くしながら考えていたんですが、実際にそれが多くの人とつて身近なものになるには、二十数年を超える年月が必要だったわけです。

——でもまだ、インターネットやホームページをどう活用すればいいかわからない人は多いですね。

インターネットを人々の権利を支援するメディアとして実現させるためには、まずインナーネット、身近な、しかし高度な要求に耐える内側のネットが充実していなければなりませんと思います。コンテンツもアクセス技術も速度も含めて内側のネットが最高に作動するようにってから、他のネットにつなぐ。そうなれば、そこで即時に最高に作動するネット間のネットワークつまりインターネットが生まれるわけです。言うまでもなく、インターネットはこのようにして育って来たものですね。

ところがいま日本の場合はいつものことで

端山氏の研究室で

すが、順序が逆で、中が空っぽなのに、とにかくつなげばいい、ページを開けばいいという傾向が強い。そして、つないでみたけれど、その先はどうしよう、というところが相変わらず起きている。だから、いきなり見かけだけ立派なことなど考えずに、まず実行可能で効果の高いところから始めていくことが大事ですね。例えば「ネットフォラム」のようなところから点をつくっていく、至るところに点を置いていく。点は近傍を持つていますから、その近傍同士が拡大して接触すると、さらに大きな一つの世界ができます。そのようなインナーネットをまずつくる。いまは、そのための一石をいくつも投じているというところです。

ホームページにも現れるこのメディアの基
本は、誰が誰のためにつくるのか、ですね。
私はいつもみんなに五つのWHOM（フーム）
が大事だと言います。FOR WHOM, OF



WHOM, BY WHOM, WITH WHOM,
TO WHOMですね。この五つが明確になっ
ていないものは、メディアとして社会的効果が
ない、と言えます。

——それは地域の情報化のための基本でもあ
りますね。

山形が安易な情報化の轍を踏まないために
は、まずインナーネットの充実を図ることか

ら始め、それを使う人がその使い勝手や内容を整備していくのが大事ですね。パブルのころ、やたらに「箱もの」がつくられてほこりを被っていると言われていますが、今度は「筋もの」をつくって、さて何に使いましよう、では困りますね。

開かれた地域に向けて

——先生はなぜ山形を選ばれたんですか。

私がこの大学に來たいと意思決定した魅力の一つは、ここが適性規模を持った地域だということです。山形県全体の人口は約百二十万人で、山形市は二十五万人。これは一つの理想的人口規模ですね。これはやはり方によっては人間が人間らしい空間に住むこ

とのできる条件です。東京のようなべたべたと拡がって大都會になってしまったところでは、いまさら人間らしい空間をつくらうと思ってもとても困難です。でもここなら、その理念さえあればこれから実現は可能です。さまざまな情報系の実験も、ここでなら地域の人たちが主体者として利益を享受する形で行うことができますから。

全県で人口約百万人と言え、中規模の大都市の機能が県全体に広がっている状態と考えられますね。非集中型の拡散した新しいタイプの都市機能空間の可能性があります。そこにかつての宿場のようにいくつかの自発的な点が設定されると、やがて近傍が育って自律的に地域をつくる。その地域は、それぞれ

独自に生まれてきたものだから、それぞれの特色を持つものになります。そこに自由な連携ができれば、魅力的で多様な顔を持った総体ができていきます。

ネットフォーラムで学生のホームページづくりを助ける



私はこれを、コンステレーション構想と呼んでいます。コンステレーションとは星座のこと、いくつかの星が集まって星座をつくる。星座になっても一つずつの星自体の主体的存在は変化しませんが、星座全体で見ると、また別の階層の存在となる。つまり、互いにさまたげないで、全体として包摂的な上位の構造をつくる。近代の考え方だと、いくつかの要素が一緒になるとき、個の存在を解消して大きな一個の存在になる。これはもう現代の要請に耐えられません。現代の社会、地域は一個の

冷えた溶岩のような塊になるのではなく、個々は自由に主體的に存在しながら総体としてより大きな機能を持つという星座構造を持たないと駄目ですね。EUはそれをめざしている現代の壮大なプロジェクトと言えます。

——そうした地域づくりの鍵をにぎる山形市民の意識はどうですか。

山形市は「山形国際ドキュメンタリー映画祭」を八〇年代の終わりから開催しており、これを実質的に支えているのは市民のボランティア活動です。このような市民のアクティビティのあるところは非常に活発で海外からも高い評価を受けています。

この大学のインターネットの接続は一九九五年ですから他に比べて遅かったのですが、つながってからは二二〇%の利用状況で、早速、山形国際ドキュメンタリー映画祭もインターネットに載せて公開しました。映画祭の会場と大学を臨時専用回線で接続し、大学から六台のコンピュータを持ち込んで、映画祭情報、山形情報満載のホームページを公開し、会場から大学を経由して世界のさまざまなホームページにアクセスするなど、学生がつきつきで「インターネットする」市民のお世話をしたり、大学と会場にカメラを置いて、双方向で会話をしたり。この結果この地域の情報化の機運が一気に進みました。山形市民、県民には、新しい状況に対する敏感さ

と、確証があるまでは動かないという両面があります。これを後押しして支援する、そういう役割もこの大学の仕事です。

——地域が変わるには、やはり外部の人間の目も重要ですね。

閉鎖環境で恐ろしいのは、自分の感受性が低くなっていることに気づく感受性を失って

しまうことです。日本は全体がそういう傾向があつて、ちよつと困りますね。これに風穴を開けるのも大学の役目の一つでしょう。

この大学では、教員の多くは東京組だし学生も大半は地域以外から来ています。これらの人を新山形人と呼びましょうか。彼らは東京にとどまらず世界と何かでつながっていますから、世界中からいろいろなものをここに持ち込むことになる。そして山形のを世界に持ち出し広めることになる。それは地域にとつては新しい知の遺伝子の交換になります。閉鎖性が解消し感受性が高まり、知的な活動、生産が活発に行われるようになる。それが地域のポテンシャルを高めることに大きく貢献します。それを願っているのです。

——確かに若者がたくさん集まっている大学は、異文化交流のメッカですね。

この大学は山の中に孤立していないで適当に街と接している、学生も教員もいろいろな形で市内や県内に出て行くし、市民も自由によつてきます。門も塀もありませんから出入り自由。そういう開かれた大学が地域にあることのインパクトは大きいと思います。そして、子どもからお年寄りまで深い年代層の交流があれば、その地域の魅力はさらに大きくなり、その重力に惹かれて人々が集まってきますからね。ここが、そういう深い大きな重力のある場になってほしいと願っています。

遂